

2 学校全体で取り組む・PBIS

枝廣和憲

1. どうして学校全体でPBISに取り組むのか

「学校全体で取り組むPBIS（スクールワイドPBIS〔SWPBIS〕）」は、「子どもたちとその子どもたちにかかわる方々（学校の先生方、家庭全体、地域全体など）の幸せ」を最大の目的としています。PBISは、家庭全体（ファミリーワイドPBIS）、地域全体（コミュニティーワイドPBIS）を含む概念です。

1992年に文部省が「学校が『こころの居場所』である」とし、2006年には文部科学省の「地域教育再生プラン（子どもの居場所づくり新プラン）」の実施、2016年の内閣府の「子ども・子育て支援新制度」等を受け、公的・民間による「居場所づくり」が多くなされています。このように、現在もなお、子どもたちの居場所の必要性が重視されています。

子どもたちの居場所を考えたとき、「学校」は重要な居場所です。学校を、ユニバーサル、すなわち、学校全体という観点からポジティブな環境にすることがとても大切になります。

2. 学校全体でPBISに取り組むための準備

学校全体でのPBISの実践を成功させる、もっとも重要なカギは「準備」です。これは、PBISに限ったことではなく、何かを始めようと思ったら、「準備」が大切です。例えば、サッカーをするのに、走り方やルール、ボールの蹴り方などを知らなければ、本当の意味でのサッカーを楽しむことは難しいでしょう。

まず、学校全体でPBISに取り組む準備を始めましょう。

(1) A（先行事象）とC（結果）へのアプローチ

PBISでは、「ポジティブな行動を行うきっかけ・状況」であるA（Antecedent〔先行事象〕）を工夫したり、「ポジティブな行動が繰り返されやすくなる出来事」であるC（結果：Consequence）に工夫をしていきます。

P B I Sに取り組む準備としては、P B I Sのベースになっている応用行動分析について知っておく必要があります（第1章③「P B I Sのベースにある応用行動分析」参照）。

(2) 三層構造とユニバーサル

学校全体で取り組むP B I Sは、「第1層（グリーン）すべての児童生徒への支援」「第2層（イエロー）リスクの高い子への支援」「第3層（レッド）より専門的な支援」へのアプローチを、エビデンスに基づいて行う三層構造になっています（第1章①「全米に広がるP B I S」、②「特別支援教育とP B I S」参照）。これにより、包括的・予防的に、ユニバーサルなアプローチをしていきます。そのためには、第一に、土台＝基礎となる第1層（グリーン）を確固たるものにする必要があります。

(3) ネガティブな行動を生み出してしまう循環

学校に限らず家庭や地域などでも、身近な人に対しては「ネガティブな行動（問題行動など）」ばかりに気をとられてしまい、「ポジティブな行動（向社会的行動など）」を見落としてしまいがちです（資料2-1-1）。そして、そのネガティブな行動に対して、注意や叱責などネガティブなアプローチをしてしまいます。実は、ここに「ネガティブな行動を生み出してしまう循環」があります（資料2-1-2）。

とはいえ、「指導」が必要ないわけではなく、一定の基準を設け、適切なタイミングで、適切な「指導」も必要です。

資料2-1-1 ポジティブな行動とネガティブな行動（井上ら（2012）を参考に作成）

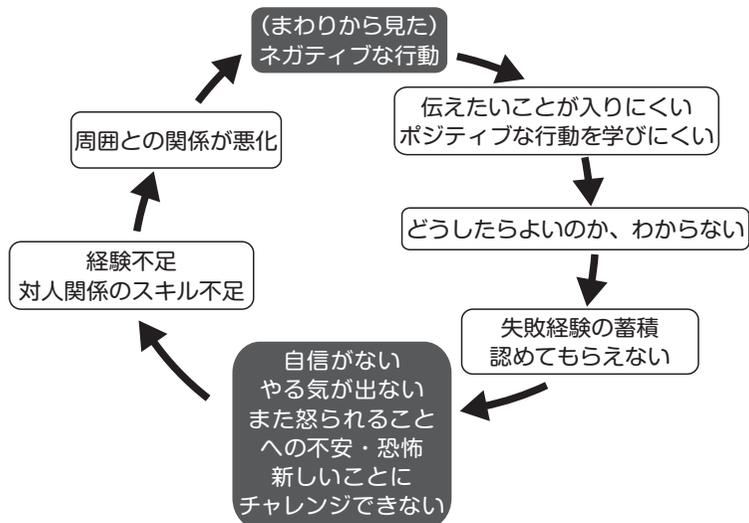


(4) 「個」から「環境」へ

では、この「ネガティブな行動を生み出してしまう循環」を、「ポジティブな行動を生み出す循環」にするためには、どのようにしたらよいでしょうか。

P B I Sの特徴として、「個」（子どもたちなど）をかえるのではなく、学校・家庭・地域など、その個を取り巻く「環境」「発想」を整えることで、個

資料2-1-2 ネガティブな行動を生み出してしまう循環



の反応に変化をもたらすことがあげられます。そのために、「一貫した結果が得られる学校環境づくり」をしていきます。

(5) 「P B I S 推進チーム」づくりと専門家との協働
P B I S は、アプローチのフレームワークですので、データに基づき組織的・構造的に取り組むことができれば、どのよ

うな学校でも取り入れられます。重要なのは、P B I S の専門家（P B I S に関する研修等を受けた先生方も含む）など、多職種協働し、「P B I S 推進チーム」をつくることです。

「新たにつくる」といわれたら、負担感が湧いてくるかもしれません。これまで、日本の学校が培ってきた実践・取り組み・専門性・文化・風土などを活かし、管理職や特別支援教育コーディネーターの先生方と協力して、「生徒指導委員会」や「教育相談委員会」など、今ある組織を活用して「P B I S 推進チーム」づくりを進めるとよいでしょう。

P B I S の専門家というと遠く感じてしまいがちですが、本書の執筆者はじめ、同じ気持ちで、各地で実践・研究している人が身近にいます。現場と専門、実践と研究をつなぐネットワークもあります。一緒に協働して、P B I S を実現しましょう。

(6) 学校のすべてのスタッフ（教職員）と「学校全体で取り組むP B I S の構想」を共有

学校全体で取り組むP B I S は、「組織全体」で取り組む必要がありますので、学校のすべてのスタッフ（教職員）と「学校全体で取り組むP B I S の構想」を共有する必要があります。先の「P B I S 推進チーム」やP B I S の専門家を中心に、校内研修会などを開き、共有の作業を進めます。

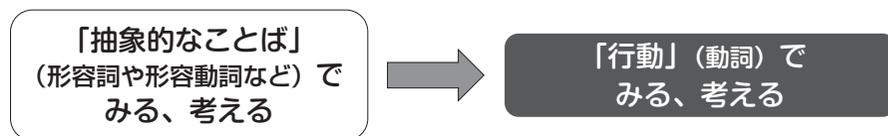
共有する主なポイントは、以下の7点になるでしょう。

① 「行動」でみる、「行動」で考える

学校でも、家庭・地域でも、よく耳にすることばとして「だらしが無い」「行儀が悪い」などがあります。あるいは、ポジティブなことばとして「明るい」「優しい」というものもあります。

これらは、「抽象的なことば」であって、「行動」ではありません。「行動」でみて、「行動」で考えるポイントは、「抽象的なことば」を「動詞」に置き換えることから始まります。

資料2-1-3 「行動」でみる、「行動」で考える（井上ら（2012）を参考に作成）

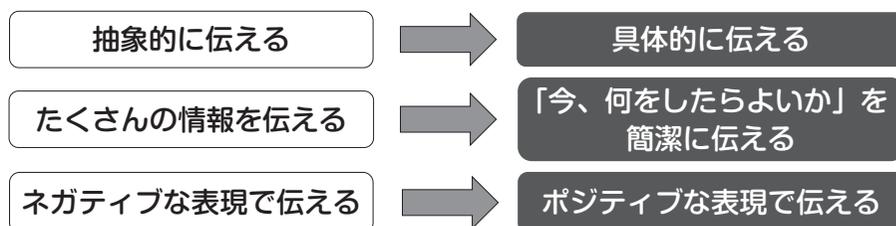


②メッセージの工夫

「きちんとしなさい」「ちゃんとしなさい」ということばも「抽象的なことば」です。何度そのことばを伝えても、ネガティブな行動を繰り返してしまう子どもはいませんか？ それは、「きちんと」や「ちゃんと」というのが、「具体的に何をすればよいのか」がわかっていないのかもしれない。そのようなときは、例えば「ちゃんとしなさい」であれば、「授業中は前を見ようね」など、「何をしたらよいのか」を具体的に伝えるようにしましょう。

また、私たちはネガティブな行動があると、どうしても「長く」「たくさん」の情報を伝えてしまいます。そうすると、たくさん情報があすぎて、子どもたちは「今、何をすべきなのか」を理解するのに時間がかかってしまいます。そういうときは、まず「今、何をすべきなのか」を「簡潔」に伝えます。そして、その行動ができたら、そのあとで、ネガティブな行動について、一緒に考え、伝えていきます。その際、「～しない」「～できていない」のようなネガティブな表現ではなく、「～する」「～している」というポジティブな表現で伝えることが大切です。

資料2-1-4 メッセージの工夫（井上ら（2012）を参考に作成）



③学校全体で課題を共有する

まず、先生一人ひとりが学校で課題（問題行動など）と感じていることを、「実態把握シート」の「課題」の部分に記入します（資料2-1-5）。

次に、それを持ち寄って各グループ（学年団など）で、ブレインストーミングの要領で「課題の洗い出し」をします。その際、先ほどの【①「行動」